

Title	系統研究部門(I 研究所の概要)
Author(s)	江原, 昭善; 野上, 裕生; 相見, 満; 瀬戸口, 烈司
Citation	霊長類研究所年報 (1977), 7: 20-21
Issue Date	1977-11-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/162778">http://hdl.handle.net/2433/162778</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

crab (*Tachyleus. tridentatus*) Jap. J. Med Sci. Biol., 30, 74-77.

- 28) Nakamura, S. and K. Takahashi (1977): Amino acid sequences around 1,2-epoxy-3-(*p*-nitrophenoxy) propane-reactive residues in *Rhizopus chinensis* acid protease. Homology with pepsin and rennin. J. Biochem., 81, 805-807.
- 29) Nakamura, S., T. Morita, S. Iwanaga, M. Niwa and K. Takahashi (1977): A sensitive substrate for the clotting enzyme in horseshoe crab hemocytes. J. Biochem., 81, 1567-1569.

## 学 会 発 表

- 1) 霊長類グルタチオン S-転移酵素の多様性と性質  
浅岡一雄・高橋健治  
日本生化学会第49回大会札幌 (1976)
- 2) ニホンザル肝臓の中性プロテアーゼの性状  
十川和博・高橋健治  
日本生化学会第49回大会札幌 (1976)
- 3) サル肺酸性プロテアーゼの精製と性質  
森山昭彦・高橋健治  
日本生化学会第49回大会札幌 (1976)
- 4) ニホンザルの糖を含むペプシンノーゲン  
景山 節・高橋健治  
日本生化学会第49回大会札幌 (1976)
- 5) サル血漿ドーパミン-β-水酸化酵素活性の年令による変化  
加藤 武・生田敬子・永津俊治・高橋健治  
日本生化学会第49回大会札幌 (1976)
- 6) Bovine plasma factor XIII: its molecular structure and function.  
Iwanaga, S., S. Nakamura and K. Suzuki. The 16th International Congress of Hematology (Kyoto) (1976).
- 7) Bovine cold-insoluble globulin: purification, properties and biological function.  
Suzki, K., S. Nakamura and S. Iwanaga. The 16th International Congress of Hematology (Kyoto) (1976).
- 8) Fibrinogen "Mitaka": A hereditary hypodysfibrinogenemia. Muraki, H., Y. Ando, S. Matsuda, M. Kikuchi, M. Hasegawa, F. Ono, M. Yamamoto, M. Suzuki, S. Nakamura and S. Iwanaga. The 16th International Congress of Hematology (Kyoto) (1976).
- 9) カプトガニゲル化反応のメカニズムと精製 coag-

## ulogen の性質

- 中村 伸・岩永貞昭  
丹羽 允・原田敏枝  
第23回毒素シンポジウム (伊東) (1976)
- 10) カプトガニの血液凝固因子 (coagulogen) の蛋白  
化学的性状およびそのゲル形成反応の分子的作用  
中村 伸・高木 尚・岩永貞昭  
丹羽 允・高橋健治  
第27回蛋白質構造討論会 (札幌) (1976).
- 11) カプトガニ coagulogen の一次構造とゲル形成  
高木 尚・中村 伸  
岩永貞昭・丹羽 允  
笠岡シンポジウム: カプトガニの医学への貢献  
(笠岡) (1976)
- 12) カプトガニの血液凝固系: エンドトキシン感受性凝固酵素の精製と、その基質特異性  
中村 伸・森田隆司・岩永貞昭  
丹羽 允・高橋健治  
日本薬学会第97年会 (東京) (1977)

## 系 統 研 究 部 門

江原昭善・野上裕生  
相見満・瀬戸口烈司

## 研 究 概 要

- 1) 霊長類各分類群の形質特徴の比較形態学的・系統発生的研究  
江 原 昭 善
1. 頭部支持機構の比較形態学的研究 (継続中)
2. ヒトを含む霊長類下顎角の発達と機能の形態学的分析 (継続中, 江原・茂原)
3. ヒトを含む霊長類の爪の組織学的研究 (継続中, 江原・松本・Rothe)
- ゲッティンゲン大学に在学している各国の学生, 日本国内で飼育されている各種のサル類, 新世界ザルなどの爪について, メラニン色素顆粒の分布と密度の比較研究をおこなった。
- 2) 熱帯アジアにおけるヤセザル類の形態学的な系統研究  
江 原 昭 善
- 1976年7月3日より10月29日まで, おもにメンタウエ諸島のシブルット島において, 小型テナガザル, メンタウエイヤセザル, シシバナザルとブタオザルの形態学的研究をおこない, 東南アジア各地に分布する各分類群との比較検討をこころみることにより, 系統関係の解明につとめた。なお, シブルット島において, 上記4種

の頭骨収集に成功し、現在、詳細な研究をおこなっている。

### 3) 東南アジアの地史学的研究

野上裕生

1976年11月1日より12月31日まで、おもにサラワク州において、第三紀の地史を検討した。また、日本人研究者の霊長類調査の可能性について、現地の当局者と折衝した。

### 4) 霊長類歯牙の組織学的研究

野上裕生

霊長類歯牙の組織学的研究をおこなうために、各分類群の歯牙の収集と研究設備の充実をはかった。

### 5) 日本産ヤチネズミ類(ゲツ歯目)の分類学的研究

相見満

日本の哺乳動物相の現状とその成立過程を追求する一環として、最新世中期より現世までのヤチネズミ類の変遷を研究している。

### 6) 現生霊長類の比較形態学的研究

相見満

個体の成長過程を通じて種の形質特徴がいかに出現するかを、骨格をおもな対象として検討している。

### 7) 第三紀の食虫類、原猿類と有袋類の研究

瀬戸口烈司

ワイオミング州から産出する第三紀前期の豊富な資料をもとにして、哺乳類の適応放散について研究を進めている。また、日本各地の第三紀層を再検討し、比較資料の収集をこころみている。

## 総 説

- 1) 江原昭善・渡辺直経 (1976): 猿人。中央公論社、東京。
- 2) 野上裕生 (1976): 先史への発掘。大陸書房、東京。

## 論 文

- 1) 瀬戸口烈司 (1977): 中生代哺乳類の進化と霊長類の進化。“今西博士古稀記念論文集2,” pp.95—129, 中央公論社、東京。

## 学会発表その他

- 1) 生物現象における類縁性と系統の設定手順  
江原昭善  
第36回日本動物心理学会特別講演 (1976)
- 2) 霊長類およびヒトの爪のメラニン色素について  
江原昭善・松本 真  
H. Rothe  
第30回日本人類学会・民族学会連合会 (1976)
- 3) 真猿類の動物地理学的考察  
相見満

第1回霊長類の系統・進化  
と周辺科学研究会 (1977)

### 4) 哺乳類の生活様式の生物学的基礎

瀬戸口烈司

第1回霊長類系統・進化と  
周辺科学研究会 (1977)

### 5) 霊長類の性的二型—形態学的観点から

江原昭善

第7回ホミニゼーション研究会 (1977)

## 幸島野外観察施設

岩本光雄(施設長・兼)・河合雅雄

(施設長事務取扱・兼)・森 明雄

幸島をめぐる観光開発や観光客の増大によるフィールド維持の困難さは持続している。この問題は基本的には、国による管理体制をとることが最も望ましい解決法であろう。

51年2月、幸島と本土の間の海域に砂が堆積し、干潮時には陸続きになる現象が起った。このため観光客は自由に渡島でき、またサルが観光客の餌にひかれて本土に渡る可能性ができており、その管理に大きな努力を注いだ。幸い、夏の台風で堆積した砂が流れ、陸と島が離れたが、52年3月再び島が陸続きになり始めた。

なお、51年11月より岩本施設長の海外出張に伴ない、51年11月18日～52年1月22日まで河合雅雄が施設長事務取扱となった。

## 《群れの状況》

幸島に生息するニホンザルは、94頭(52年3月現在)である。今年度はリーダー交代があった。その過程は、52年11月、第3位のオス・エイが行方不明となった。12月末に突然第4位オスのナベが第1位オスのセムシよりも優位になった。52年1月初めに第2位オスのノミが姿を消し、続いて2月セムシも姿を消した。その結果4位のナベがリーダーとなり、2位はクモとなり、以前から群れのメンバーであるオトナオスが、少なくなったが、それと同時に、数頭のソリタリーオスが群れに加入した。これらのソリタリーオスが群れのメンバーとして定着するには、ある程度の期間が必要である。

## 研究概要

- 1) 幸島のサルの生態学的社会学的研究  
森 明雄・三戸サツエ  
冠地富士男・山口直嗣  
前年度からの継続で、ポピュレーション動態に関する諸資料を収集している。毎月1回はほぼ全個体の体重測定を行っている。社会学的研究については、通年の変化